

MEETING REPORT

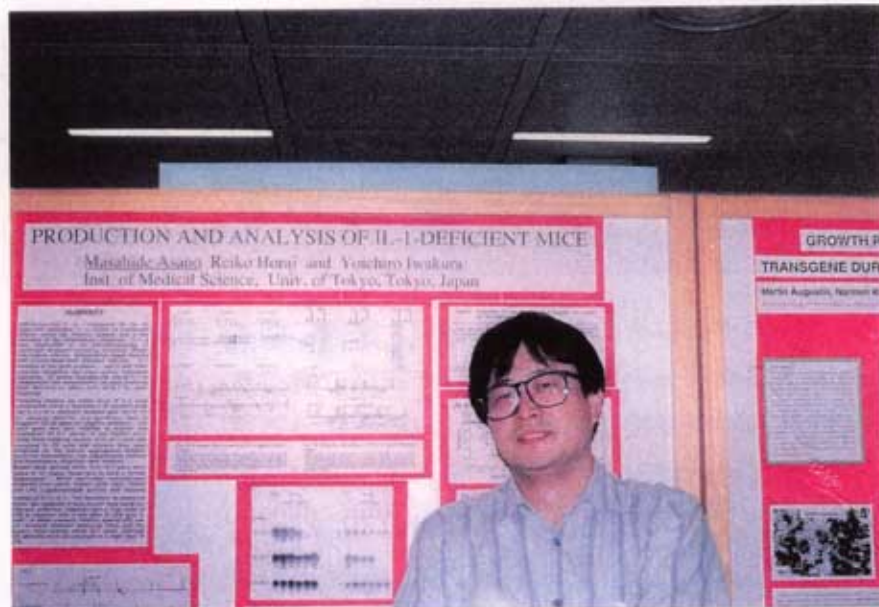
Mouse Molecular Genetics に参加して

実験動物研究施設助手
浅野 雅秀

写真：ポスターの前にて

Mouse Molecular Genetics (MMG) Meeting はハイデルベルグの EMBL とニューヨークの CSH で交互に開かれるミーティングで、今年は8月の下旬に EMBL で開かれ、私も3年ぶりに参加しました。ミーティングの主なテーマは哺乳類の発生生物学・遺伝学にあるのですが、遺伝子ノックアウトマウスやトランスジェニックマウスを用いた研究発表が多く、その分野も免疫学や神経生物学まで広範囲にわたっています。

今年の特徴としては、多くの研究室で遺伝子ノックアウトマウスの作製が行えるようになり、単に一つの遺伝子を破壊したマウスを解析するだけでなく、関連する遺伝子を次々とノックアウトしてそれぞれの遺伝子の役割を明らかにすると共に、ダブルノックアウトマウスを解析して互いに重複する機能を解明している点でありました(たとえば neurotrophin とそのレセプターや BMP ファミリー)。我々も IL-1 α と IL-1 β の二つのノックアウトマウスを作製して、その解析結果をポスターで発表しました。また同じ遺伝子を破壊してもマウスの遺伝的背景によって、現れる表現型に大きな違いが見られる例がいくつか報告され(たとえば EGF-R)、用いるマウスの系統にも注意



が必要であること並びに129系統以外の ES 細胞の必要性が感じられました。この点では129以外にも C57BL/6, BALB/c, DBA/2 など新しい ES 細胞株が樹立され、今後特に免疫学の分野で重宝されると思われます。半分以上の発表でノックアウトマウスを作製しており、この勢いで進むと遺伝子のクローニングを追い越して、ノックアウトする遺伝子が多くなる日も近いと思われます。そこで、ES 細胞のテクニックを用いて、新しい遺伝子をクローニングすると同時にノックアウトもしてしまおうと、遺伝子トラップを始めたグループが数多く見受けら

れました。

国際学会の楽しみの一つは、久しぶりに外国の友人に会うことができることです。私もかつて留学していた P. Gruss の研究室の連中に会うことができ、楽しい時を過ごしました。ただ残念なことは、連日夜11時頃まで発表が続くので、ゆっくり飲みに行く時間も体力もなくなることです。最後に、医科研国際交流基金の援助により本学会に参加できたことを心から感謝致すとともに、今後できるだけ多くの若手研究者がこのように形で国際学会に参加できることを希望します。

編集
後記

8月から10月にかけて、国内・海外の出張が続きました。海外では、米国、フランス、オランダ等の医学・生物学系の幾つかの研究所を見学して、研究者とのディスカッションを行う機会を得ました。これら海外の研究所と医科研とを比較した場合、研究グループの組織の仕方、研究所の運営などに大きな違いがあることを痛感致しました。

本号も前回同様、編集作業を菅野・北両委員に

殆どお願い致しましたが、原稿を書いていただく方々のご協力のお蔭で、編集作業は順調だったとのことでした。これは編集に携わる側としては有り難いことではありますが、内容的にマンネリ化して行く危険も感じております。今後の紙面の改善のためにも、御感想・御意見をぜひ編集委員の方へお知らせ下さいようお願い致します。

(改)